

「平成 26 年度 交通安全教育指導者研修会 レポート」作成：2015.2.5（木） 柳原康弘

名称：平成 26 年度 交通安全教育指導者研修会
期間：2015 年 1 月 29 日（木）30 日（金）
会場：国立オリンピック記念青少年総合センター
主催：（一財）日本交通安全教育普及協会

OSCN 参加者：片山 柳原

研修会参加者数：104 名（資料より引用）

【研修会内容】

★ 1 月 29 日（木）

1. 講義 1（60 分）：高齢者の交通安全推進に向けての課題（交通評論家：矢橋 昇）
2. 講義 2（60 分）：子どもの安全指導 ～自分の身は自分で守る～（練馬区上石神井児童館館長：内山 則子）
3. 講義 3（60 分）：交通安全指導における話し方&指導の仕方（株式会社ビジネスファーム代表取締役：藤原 徳子）

★ 1 月 30 日（金）

1. 実践発表 1（60 分）：幼児交通安全教室の内容について（名取市交通指導隊 教育班長：佐藤 圭子）
2. 実践発表 2（60 分）：高齢者にわかりやすい交通安全教室教材（南アルプス市交通指導員：中澤 裕子／大久保 由美子）
3. 班別協議（150 分）：6 班にわかれて協議
4. 全体会（40 分）：班別協議の発表

【講義 1（60 分）】

高齢者の交通安全推進に向けての課題 講師：交通評論家 矢橋 昇（80 歳）

高齢者の交通事故の実態、原因、対策などの講義でした。

交通死亡事故の 50%が「高齢者」だそうです。

高齢者は加齢による心身機能の低下で視野が狭くなり見落としがある、左右に首を振るが実際は見渡せていない。道路を歩行横断で斜め横断をするなど。

高齢者の交通事故を防ぐには

「高齢者だけの問題ではない」、交通ルールはみんなで知る。

現状では、「公共マナー」が低下している。例えば、「人の多い店内では、リュックを手に持つ。背中に背負ったままでは、リュックに神経はないわけで、展示物に当たって倒したりする」

社会全体が「言われてしたがう」＝「順法態度」、「規則だから守っている」風潮。

規則を味方につけられる意識を持つことを向上したい。

世の中は「危険平気症」「迷惑平気症」生活習慣病の一つ？として蔓延しているのではないか。

高齢者に交通指導する時の問題点

高齢者は「人の事を聞かない」「指導されるのを嫌がる」

「らしからぬ高齢者」が増えた。「高齢者としてのプライドをなくしている」

高齢者に交通指導する時のポイント

「高齢者」へは、尊敬の念を持ち、人生の先輩としての対応を心がける

高齢者へは、高齢者としての自覚を再確認してもらい「わきまえて慎重に行動してもらう」

先ず「意識」「考え方」を変えていただく。

具体的なポイント

- ・高齢者のペースを乱さず「急かさない」
- ・「準備に手を抜かない」
- ・「入念に安全確認」
- ・「周辺とのコミュニケーションの大切さ」
- ・「行動の妥当性の確認」
- ・「出発前の気持ちの引き締め」
- ・「運転」とは「危険作業」である。

先生は、自分なりのしきたり「白グローブ」をすることで「運転する意識のスイッチ」を入れているそうです。

【講義2 (60分)】

子どもの安全指導 ～自分の身は自分で守る～ 講師：練馬区上石神井児童館館長 内山 則子

児童館を通じ、子供には、自分で自分の身を守ることを教えている。遊びを通じ学ぶ。

自転車での事故はない、ただし、職員の事故は2件発生。

活動中の事故：施設内で便所の踏み台、机、壁を壊す、子供は無傷

遊びでの事故：病院対応を必要とするのは、肩から上部の怪我。突き指、骨折、衝突による検査

児童館での対応 医療行為は禁止 「マキロン」もNG

【講義3 (60分)】

交通安全指導における話し方&指導の仕方 講師：株式会社ビジネスファーム代表取締役 藤原 徳子

指導者としての話し方、指導の仕方の講義でした。

指導する時の「ゴール」は、大きく2つ。

1. 「知識」を伝える。
2. 「スキル」を伝える。

また、伝えたいことが沢山ある場合、あれもこれも伝えようとするので、伝えたいことは絞る。

指導内容を伝える時の心得、対象者は2つ。

「**幼児・学童**」に対しての心得2つ

1. 分別のある賢い子供を育てるために、幼児語を避け、丁寧な言葉で接する。
2. 「質問法」の活用「～は、あるかな？（ありますか?）」と、様々なことを問いかけます。

「**学生・高齢者**」に対しての心得4つ

1. 「命令形」より「疑問形」、例「～してください」より「～していただけますか?」という言い方にする。
2. 相手の話を復唱する時は、相手の使った言葉で繰り返す、相手の言葉を正す必要はない。
3. 相互関係の一線を越えない、「親しみの勘違いをしない」ためにも、丁寧な言葉で会話する。
4. 話し方に「情」を込める、人はものの言い方に影響される。

指導者として「伝える技術」を身につける。

「伝えたい内容」よりは「印象を残す」、印象を残すための技術。

メッセージの伝え方として話し方のポイント4つ

- 1.最も言いたいこと（主題）を述べる
- 2.共通言語を用いる（例え話を活用するといい）
- 3.筋道を立てる（ナンバリング方式、3つくらいまでがベター）
- 4.短文で言いきる（言いきりが記憶に残る）

【実践発表1（60分）】

幼児交通安全教室の内容について 発表者：名取市交通指導隊 教育班長 佐藤 圭子

会場を「代々木幼稚園」と見立てて、発表者の方が先生役で参加者が幼児役で実演発表していただきました。

「右手」を上げる時、先生役の方は、幼児役の見た目の位置に合わせて「左手」を上げる工夫をしていた。

紙芝居「おむすびころりん」を交通安全バージョンにアレンジしていた。

紙芝居の中に、「鬼」が出てくるが、幼児には怖すぎる場合があり泣く子がいる、

その場合は、ぬいぐるみの鬼を用いる。

紙芝居からのくだりで、「しんごうマン」へ繋げ、「しんごうマン体操」（100カロリー）へ持って行く。

「左右の確認」の時、幼児の年齢で手法を変える。

- ・3歳＝肩をたたく
- ・4歳＝手をたたく
- ・5歳＝本人にまかす

「とまとのおやくそく」

- ・（と）とまること
- ・（ま）まつこと
- ・（と）とびださない

塗り絵のお土産を渡すそうです。道路は「右側」を意識させる。

「車道」と「歩道」の境目（白線）を伝える。白線は車道と歩道の「おしらせ」と表現する。

歩行訓練もする、疲れるので、キャンディーをプレゼントする。

【実践発表2（60分）】

高齢者にわかりやすい交通安全教室教材 発表者：南アルプス市交通指導員 中澤 裕子／大久保 由美子

高齢者対象の実演発表していただきました。目の錯覚を利用したアイテムを用いて、心身機能低下の再認識。

扇型のアイテムを2つ上下に重ねると上が小さく見える。同じ長さの棒をT字に見せると上の棒が短く見える

暗い時の視認性

暗い場所では上から下へ見やすくなる色の並び、黒色が目立たない色／白色が一番目立つ色。

- 1.黒
- 2.青
- 3.赤
- 4.黄
- 5.白

距離感の確認

実際のひもの長さで、1秒間にくるまが進む距離 11m をひもの長さで見せる。

「交通標識」へ「興味」を持たず、標識ボードゲーム

信号機の確認

実際の信号機の「丸の部分」の機械を用いて、信号機の意味を再確認

信号機の色並び（決まっている）

（青）（黄）（赤）

色の意味

- ・（青）確かめて渡る
- ・（黄）危ないから待つ
- ・（赤）絶対に渡らない

反射神経のテスト

棒を持ち、離して落とした棒を掴む反応速度

「もしもしかめよ」のリズムに合わせて、肩を 8回、4回、2回、1回たたくスキンシップ

【班別協議（150分）】 6班にわかれて協議

各班に分かれて個別のテーマを協議しました。

- ・1班（15名）：幼児（歩行）
- ・2班（14名）：幼児（歩行）
- ・3班（15名）：児童（中学年）自転車班1 ※ OSCN 片山 参加
- ・4班（15名）：児童（中学年）自転車班2 ※ OSCN 柳原 参加
- ・5班（20名）：高齢者班
- ・6班（18名）：指導者の養成+広報啓発の在り方
※ 片山さんは3班、柳原は4班で協議をしました。

【全体会（40分）】

班別協議の発表

各班での協議を代表者が発表（5分）しました。

1班（15名）：幼児（歩行）の発表

横断歩道で手をあげないほうがいいのか？

手をあげると、左右確認の時に視界の妨げになる。

まわりを見る意識を研ぎ澄ます必要がある。

2班（14名）：幼児（歩行）の発表

保護者の意識を高めたい

モラルの低下を変えたい、広報啓蒙で新聞やホームページの活用

チャイルドシート推進、恐怖体験のPR

教習場の活用、くるまの死角体験は有効

ミニ信号機で歩行訓練

子供が喜ぶ教材、自作でご当地キャラの活用

3班（15名）：児童（中学年）自転車班1

3つのテーマ、「準備」「場所」「体制」

ヘルメットの親御さんの理解、水風船などを活用してヘルメットの重要性和頭の構造を再確認。

雨の日は室内でエア自転車、新聞紙を丸めた棒をハンドルとして持ちながら

死角体験の重要性、内輪差体験。

学校や地域社会への呼びかけ

4班（15名）：児童（中学年）自転車班2

テーマは自転車の指導3点、「コース」「指導ポイント」「保護者の理解」

コースについて、晴れでも雨の場合のため、体育館で行う。

コースにリアリティーがない、体育館の中にある点数つける備品で壁を作る。ルールに沿った指導をする自転車のバランス感覚スキルを反復練習で体で覚える、親にも体験してもらう。

バランスの観点からヘルメットの理解を得る。

お母さんに興味も持ってもらおう秘策「ママチャリで美脚」そこからルールの理解をひも付ける

5班（20名）：高齢者班

高齢者はプライドが高い、尊敬したほうがいい。

視野の狭さを体験して自覚してもらう。

6班（18名）：指導者の養成+広報啓発の在り方

ちらしやホームページは、見ない人が多い。

直接関係のないボーリングイベントなどに飛び込みで広報活動してはどうか

指導者は不足している。

静岡の場合、指導者はプロパーでやっている（有給で働いている事）

また指導者のプロパーとしての地位の確立が望まれる。

参加してみて柳原の主観

今回、初めての参加と経験でした。一つの言葉で表現すれば「意識の変革」を強く感じた研修会でした。交通安全教育の主なターゲットは「幼児」と「高齢者」（改めて実感）

【幼児への指導】

幼児への指導は、「知識」と「スキル」が幼児にとって新しい学びとなる。

同時に、幼児への交通教育には、「しつけ」要素も含まれると思うと、「親の協力」も必須になる。

親の交通教育への認識を深めるためにも、まず「親の意識」を変える必要を感じているようです。

「親の意識」を変えるためには、子供と密接している「お母さん」が主なターゲットですね。

お母さんへの「自転車への興味」をどう植え付けるか？が課題だとも感じました。

【高齢者への指導】

高齢者の場合、「知識」と「スキル」は、再確認となる場合が多い。

また、加齢による心身機能の低下による「知識」と「スキル」のクオリティーの低下を再確認（自覚）させる指導が求められていると感じました。

また、高齢者には、「指導をいやがる」などの要素も付加しているので、指導者は、高齢者向け専用の指導スキルを学ぶ必要があるとも感じました。

高齢者指導は、高齢者だけの問題ではなく、周りの理解が必要のようです。まずは高齢者を尊敬する意識を高める事を感じました。

【両者への共通の課題】

「幼児」「高齢者」ともに、「知識」と「スキル」がそれぞれにボリュームのある内容の難易度の高い要素であり、それらをひとまとめに指導している感が現状だとも感じました。

幼児であれば、自転車操作スキルを覚えるのに頭いっぱいになっているところへ、同時進行で交通ルールを教えている状況ではないでしょうか？

1. 「交通ルールを伝える事」（交通ルールを覚える事）
2. 「自転車操作を伝える事」（自転車操作を覚える事）

この2つは、分別して指導したほうがいいのか、なんて事をおもいました。

また、指導者として「指導方法」とは「伝える技術」であり、細かな内容（交通ルールや自転車技術）の充実も不可欠ですが、どう「印象に残す」か、どう「記憶に残る」か、ターゲットの「意識の変革」を意識して、効果的な指導方法を指導スキルとして学ぶ必要を感じました。

以上です。

ありがとうございました。

